28. 総義歯装着下顎前突患者における外科矯正手術の経験

山本圭子，江上史倫，内田暢彦
茂尾公晴，小島薫里，武藤壽孝
金沢正昭
（北医療大・歯・口外１）

患者は57歳女性。オトガイ部の前突感の改善を主訴に来院してきた。義歯の安定も悪いため，オトガイ形成術の他に，下顎前歯部に非可動粘膜の拡大を目的に２次的上皮下による相対的顎堤形成術を施行した後，新義歯を作成した。その結果，審美的および機能的にも，十分な結果を得た。

29. 予防的抗菌薬投与を行わない外科矯正手術

荻野　司，江上史倫，冨岡敬子
川上謙治，武田成浩，奥村一彦
道谷弘之，武藤壽孝，金澤正昭
（北医療大・歯・口外１）

顎変形症患者に対する術後感染予防の観点からの抗菌薬投与の必要性について報告した。術後の抗菌薬非投与群の経過は特に問題はないが，術後の体温推移は術後３～４日までやや高い傾向にあった。白血球数の推移に差はなかった。CRP の変化は術後３日目までやや上昇傾向がみられた。いまだ症例数は少ないが術式を十分配慮すれば予防的抗菌薬投与の必要性は低いと推察された。

30. 当科で行っている仮骨延長の２例

苅部成康，野口芳広，飯久保真貴
井上　諭，三木裕香子，佐藤淳一
岩成進吉，田中　博
（日大・歯・口外１）

今回，われわれは，仮骨延長を経験したので報告する。症例１：24歳，男性。当科初診約２年前に上顎前歯部を強打し，平成10年６月５日来院。212脱落，歯槽骨欠損を認めた。症例２：19歳，女性。10歳時より顎骨形成不全，下顎の発育不全，反対咬合，開咬を認めた。術後，症例１では歯槽高径の増加を認め，症例２では顔貌，咬合状態の改善を認めた。

31. 80歳以上の高齢者口腔癌患者における臨床的観察

小池博文，宮川昌久（千大）

当科における過去20年間の80歳以上の高齢者口腔癌患者41例について統計的観察を加えた結果，性別は男15人，女26人で平均年齢は83.6歳であった。部位別では歯肉に発生した症例が最も多く，ステージ別分類ではⅢ，Ⅳの進行症例が48％に認められた。初診時合併症を有する症例が66％に認められた。３年，５年累積生存率は手術症例がそれぞれ72.8％，非手術症例が21.5％，12.5％であった。

32. 診断に苦慮した舌扁平上皮癌の１例

内田貴士，野間　昇，慎　貴秀
長谷川光晴，福与晋邦，武田秋生
石井輝彦，岩成進吉，田中　博
工藤逸郎　（日大・歯・口外１）

患者は60歳女性。左側舌縁部の有痛性の潰瘍を主訴に来院。前医での治療を含め３回の生検を行ったが悪性所見は見られなかった。臨床経過，画像診断より舌悪性腫瘍を強く疑ったため腫瘍切除術，左上頸部郭清術を施行。術後の病理組織診断は扁平上皮癌であった。その後，右頸部リンパ節転移を認めたため右全頸部郭清術を行ったが梨状陥凹部に再発を認め，化学療法と放射線療法行うも奏効を認めず，全経過24カ月で死亡した。

33. 細胞診にて診断しえた oncocytic metaplasia をともなった口蓋腺房細胞癌の１例

金沢春幸，水町裕義，古谷隆則
（君津中央）

69歳，男性の右側軟口蓋粘膜下に示指頭大の境界不正，弾性硬の腫瘤を認めた。穿刺吸引細胞診にて腺房細胞癌が強く示唆されたため，拡大切除手術を施行した。病理組織所見：腫瘍は好塩基性を示す腺房細胞様細胞の充実性増殖からなり，一部 oncocyte 様パターンを呈していた。電顕所見：腫瘍原形質内には腺房細胞癌の分化マーカーである多数の分泌顆粒と oncocyte の特徴であるミトコンドリアの発達がみられた。

34. 口腔扁平上皮癌における *FEZ*1 遺伝子の転写異常

小野可苗，鵜澤一弘（千大）

我々は，第８染色体短腕（8P）上に共通欠失領域（8p22）を同定し，近年，8p22 上に食道扁平上皮癌で高度に異常を起こしている *FEZ*1 遺伝子の発現状況を口腔癌患者30症例を RT-PCR によって分析，検討したところ，60％以上に欠失および減弱がみられ，*FEZ*1 遺伝子の発現の低下が示唆された。従って，*FEZ*1 遺伝子は，口腔癌発生に関与した有力な癌抑制遺伝子であることが考えられた。